聞き書き、いくつかの断章から

Writing down people's Dictation: from the several fragments of people's lives

赤坂　憲雄
AKASAKA Norio

Writing at commoners' dictation is one of the most valuable methods in the studies of folklore. After having studied Tosa Genji (土佐源氏) written by Miyamoto Tsuneichi as a textbook, the students in my class were required to write down what they hear about the life of the aged. What came out of the submitted reports is potentiality of this method, which enables us to link the individual history to the larger one. From the experience of connecting two different "histories," we were able to deepen our thoughts concerning one's memory, story, and history. In the dawn of the 'Local Community Age,' the importance and possibility of the dictation should be reconsidered.

はじめに

わたしはフィールドワーカーではない。たぶん、かつてフィールドワーカーであったことはないし、これからもないだろう、と思う。ただ、好奇心にそそのかされて、必要にも迫られて、東北に拠点を移してからの歳月のなかで、ほんのつかの間、東北の村や町を聞き書きのために歩きまわったことがある、というだけのことにすぎない。わたしの周囲には、すぐれたフィールドワーカーたちが何人かいて、かれらを見ていると、わたしのやって来たことなど真似事か、ほんのサワリ程度のものでしかないことを、痛いほどに思い知らされる。それでも、五、六年ほどのあいだ、聞き書きの旅をくりかえしながら、多くの体験を重ねてきた。多くのことを身をもって学んだ。そのいくつかに触れてみたい。これは聞き書きという方法をめぐって紡がれた、蛇行する覚え書きである。

断章その一／「土佐源氏」から、たとえば聞き書きの授業へ

聞き書きという方法はむろん、民俗学にとってもっとも大切な出発点である。

たとえば、宮本常一の『忘れられた日本人』などは、ほとんど記念碑的な意味合いを帯びた聞き書きの記録である。そこには、宮本が西日本の各地を歩き回り、出会った老人たちから人生を聞き書きしたエッセイが、十数編

収められている。そのなかの一編、「土佐源氏」と題された十数ページのエッセイは、おそらく日本の民俗学が聞き書きを通して産み落とした日本人論として、たいへん優れた傑作になっている。その内容はまったくのエロ話であり、主人公は盲目の乞食であった。宮本常一という民俗学者は、四国の山深い村のはずれの橋の下に掘建て小屋を作って暮らしている、八十歳の盲目にして乞食の老人に聞き書きをして、「土佐源氏」という文章を残したのである。

主人公は『源氏物語』の光源氏のように、たくさんの女性遍歴をくりかえす。だから、宮本によって土佐源氏と名づけられたのである。かれはいわゆる「ててなし子」であった。まだ結婚していない母親のところに、誰とも知れぬ若者が夜這いにやって来て、そこで身籠もってできた子どもということだ。じつは、たかだか四、五十年前くらいまでは、日本の村々ではごく普通に夜這いの習俗が行なわれていた。古くからある男と女のセックスを仲立ちとした関係の形として、また結婚のフォークロアの一部として、夜這いはごく当たり前に見られたということが、まず前提となる。

夜這いにもいろいろと決まりごとがあって、見知らぬ女のところにいきなり忍び込むわけではない。ところが、「土佐源氏」の場合には、母親が知らないだれか、いや、たぶん素性を明かすことができない男の子どもを妊娠してしまう。親に財力があるとか、娘がとびっきりの器量良しであるとかの条件さえあれば、娘はただちに、だれか適当な男のもとに嫁入りということになる。しかし、ここでは娘は子どもを産んで、間もなく嫁に行くが、そこで不慮の事故にあって亡くなってしまう。そこで、生まれてきた主人公は母も父も知らず、祖父母に育てられ、学校にも行かず、数えで十五歳のときに馬喰の親方のもとに奉公に出される。世間からはまともな職業と思われていない馬喰をしながら、大人になり、親方がひいきにしていた後家さんの娘と結婚する。ところが、そこには居着かずに、女から女へと渡りあるく生活を送ることになる。

「土佐源氏」は主人公が物語りする、ふたつのプラトニックな恋のエピソードによって、不意に、エロ話からの離脱を果たす。恋の相手は、ひとつは官林の番をする役人の妻であり、いまひとつは大きな庄屋で県会議員をやっていた男の妻であった。たとえば、庄屋の妻との関係は、タブーの侵犯のゆえに不思議な緊張感に浸されている。男が巧妙に恋の罠を仕掛け、二人は納屋の藁のなかで結ばれる。大きな身分の裂け目を踏み越えて、男と女が身も心も裸になってぶつかり合う、とてもいい場面である。主人公のような身分の男が庄屋の妻をかどわかしたことが知られれば、おそらく殺されるにちがいない。男はそれにもかかわらず、なぜそうした女性に惹かれるのか。それはただ、その人から人間として扱われたからだ。男として、一人前の存在として認められたということが、決定的にこの主人公にとっては大きな歓びだったのである。だから、このエピソードには、どこかプラトニックな恋の印象が拭いがたくある。

結局、この主人公は五十歳くらいで失明する。すると、妻がやって来て、土佐のある村のはずれの橋の下で暮らすようになる。「ああ、目の見えぬ三十年は長うもあり、みじこうもあった。かまうた女のことを思い出してのう。どの女もみなやさしいええ女じゃった」という呟きの言葉で、このエッセイは結ばれる。こんなセリフ、並の男にはなかなか言えるものではない。やはり、これは土佐の光源氏の物語だったのである。

＊　　＊

ところで、この「土佐源氏」をテクストとして、何度か授業をやっている。いくつもの興味深い体験をしている。聞き書きという方法の可能性と、また限界とが、そこには露出していたといっていい。

まず、何ひとつ説明せずに学生に読ませ、感想文を書かせてみた。女子学生の反応に多かったのが、戸惑いと反発であったのは、むしろ当然であっただろうか。たとえば、一人の女子学生は、提出したレポートの一節にこう書いていた、「超むかつく男である。私は読んで行くうちに、女たらしのスケベ親父に腹が立ってきた」と。そのたぐいの言葉が書き連ねられたあとに、そのレポートはこう締めくくられていた、――「この男、お金を儲ける端から、その時関係していた女にやってしまい、別に貯める気はしなかったというが、やはり幼いころ甘やかされて育った人の、典型的症状だと思う。私は、この男のような生き方は絶対できない。だから、逆に、この男の考えていることはさっぱり理解できない」。きわめて健康的な反応だと感じた。

しかし、これはけっして、「幼いころ甘やかされて育った人の典型的症状」といったものではない。たぶん、こ

れしかありえなかった「避けがたい人生」の形なのである。

なぜ、それは避けがたい人生の形なのか。その条件のひとつは、この主人公が私生児であったということだ。家という制度が非常に厳しいものとして存在した時代である。生まれ落ちたときから、すでにその制度の外に置かれ、普通の村びととしての人生を送ることを拒まれていた。数えで十五歳になっても、若衆組という、青年たちが先輩から仕事や男と女のこと、村の掟など、さまざまなことを教えてもらう場に、この男は参加することを許されない。夜這いという村の性の秩序からも排除されている。馬喰というアウトローとして生きて行かねばならない男には、普通の娘との性的な関係はありえない。そうした制度の外に生きる者たちは、後家と呼ばれた女性たちに向かう。それだけが、かれらに許された性の形だったのである。この男が生まれながらに、そうした苛酷な宿命を背負わされていたということ、それが大きなポイントになる。

学生たちのレポートを読んだあとで、わたしはこうした「土佐源氏」の背景に横たわるものに、わたしなりの注釈を加えてゆく。学生たちははじめて、この老人の人生がある時代のなかの、ひとつの「避けがたい人生の形」であったことを、漠然とではあれ了解する。すると、静かな共感をもって、この「土佐源氏」を受け入れることができるようになる。そして、この次の段階に向かう準備が整うのである。いわば、かれらのなかに、自分のかたわらにある人生にたいする関心が芽生えてくるのである。

*　　*

そこで、第二の段階がはじまる。聞き書きとは何か、それを語ることになる。

橋の下に降りて行って、盲目の乞食の老人の物語に耳を傾ける民俗学者の後ろ姿には、どこか鬼気迫るものがある。宮本常一はおそらく、橋の下にたいする想像力を持っていた稀有なる民俗学者の一人であったといっていい。「土佐源氏」というエッセイは、宮本の凄みのある立ち姿と豊かな想像力をこそ、きわやかに示している。それにしても、現代において、こうした民俗学的な聞き書きは、いったいどのような意味を持つのか、そこにはいまだ可能性が残されているのか。

わたしは山形県の最上地方をフィールドにして、聞き書きの旅をはじめた。みずからの身と心をやわらかく開き、一個の耳となって、他者に出会うための修行の旅であった、と思う。聞き書きとは何か、おぼろげではあれ、その輪郭程度には触れることができた。

それから、わたしは実験的な試みとして、大学のある講義のテーマに「聞き書きとその実践」を選んだ。あくまで実践である。数カ月の講義のあとには、予告しておいた通りに、夏休みの課題として、誰でもいいから老人を探して聞き書きをしてくることを、学生たちにもとめた。秋になるとレポートが集まってきた。四百字詰めにして七枚のレポートが、およそ四百近く、枚数にすれば三千枚足らず。たいへんなことになった。学生たちも難儀であったらしいが、こちらも難儀なことになった。読むだけで一週間もかかった。しかし、それはとても快楽に満ちた時間でもあった。

学生たちはみな、当然ではあるが、課題ゆえに仕方なく聞き書きに取り組んだのである。かれらはいわば、真正面から相手の顔を見て対話をするといったことが、たいへん苦手な世代である。自分を剥き出しにする、また剥き出しにされることを、なによりも怖れる。戸惑いに足がすくんだはずだ。けれども、これは夏休みの課題である。仕方がない。何しろ、やらなければ単位がもらえない。やっとのことで、誰か老人のところに赴く。ノートを取り出して、もぞもぞしながらも、やがて聞き書きがはじまる。孫の世代の若者たちが相手である。老人たちはみな、一生懸命に話してくれる。むろん、話し上手であったり話し下手であったり、さまざまではある。嬉しそうに思い出を話していたかと思うと、突然、涙ぐんで言葉に詰まる。五分も十分も沈黙の時間が流れる。どうしたらいいのか。途方に暮れながら、逃げ出すわけにもいかない。そんな体験を重ねつつ、かれらはそれぞれに、一生懸命に聞き書きをしたのである。

レポートの最後のほうには、ほっとしたように、短い感想が書きつけてある。思いがけず楽しかった、いい体験だった、と書いている学生がけっこう多い。ほかに、人には歴史があるということを実感した、ここまで他人としゃべったのははじめてだった、祖父母との新しいつながりが生まれた、アイデンティティを確認できた気がする、自分が変わるためのチャンスをもらったようだ、あるいは、また話を聞いてみたい、いつまでも元気でいてほしい、といった感想が多かった。

読み進めるうちに、二つの言葉がくりかえし登場することに気付いた。ひとつは「感謝」であり、いまひとつは「ありがとう」である。社交辞令の匂いはしなかった。とても生真面目に、かれらはその二つの言葉をぽつりと洩らしていたのである。

＊　　＊

たとえば、こんなレポートがあった。

南の島で生まれ育った祖母が主人公である。おばあちゃんは島で結婚した。厳しい嫁という立場に縛られた生活だった。ところが、夫が早くに亡くなったために、その南の島を離れることになる。その前半生について、この孫にあたる女子学生がたずねると、涙ぐんでしまって、なにも答えてくれない。それで困り果てたことが綴られている。

彼女はおばあちゃんと、東京の近郊のある町で出会った。おばあちゃんの娘に子どもが生まれた。そこで、おばあちゃんが娘夫婦と同居しながら、その子を、つまり彼女を育ててくれたのである。彼女が四歳になったとき、おばあちゃんは別の兄弟の家に移ってゆく。新しく生まれた孫の子守りをするために、その家を去ったのである。彼女はそのときからずっと、自分は祖母に捨てられたと思いこんできた。だから、それ以来、一度もまともに祖母と話をしたことがなかった、という。幼な心に恨みを抱いてしまったのである。それが、この聞き書きを通して、自分がどんなに愛されていたかを確認することになる。恨みが溶けたのである。

彼女はこう書いている、「まあしかし、本来これは、ばあちゃんの聞き書きだったはずなのに、何か、自分の内なる声まで聞き書きをしたようで、おもしろかった」と。これはとても大切なことではないか。聞き書きというのはじつは、他人の話をただ聞くだけではなく、自分の内側から聞こえてくる呟きの声にも耳を澄ますことなのである。

ああ、私はばあちゃんのことをここまで思っていたのかと、結構驚いているものの、それに気づくことができたってことはいいなとも思っている。けれども、こういうことは二度と書くまい。まるで恋文ではないか。二度と書くまいと思うから、最後に記念として、絶対に口に出しては言えない言葉を書いてしまおう。ばあちゃん。私は、ばあちゃんが大好きです。だから、なにも望みませんから、存在していてくれるだけで、それだけでいいのです。

たぶん、この文章が、ばあちゃんの目に触れることはないだろう。むしろ、見せたくない。けれども、ばあちゃんの知らないところで、私がひそかに感謝していることを、こうして書き留められたということだけでも、私はかなり満足している。胸の奥につかえていたものが、すっと取れた感じだ。勝手に自己満足しているなといわれても、気持ちを表に出さないのはずるいと言われても、どこが聞き書きなんだ、ほとんどお前のひとりごとじゃないかと言われても、ばあちゃんと、私自身の聞き書きをしたのだから、これは聞き書きと言えるのだと、私は答えるだろう。

とても素直な聞き書きであり、素直な感想である。彼女は「ばあちゃんと、私自身の聞き書きをした」と書いていた。これはある意味では、聞き書きをめぐる基本的な構えであり、わたし自身がつねに感じてきたことでもあった。聞き書きの現場では、しばしば自分自身の内奥を覗きこんでいる自分に気付くことがある。ひとりの女子学生はそれを、みごとに、彼女なりの幼い言葉で表現していたのである。

若い学生たちと老人とを言葉でつなぐことで、何が見えてくるのか。これはかぎりなく実験的な試みでもあった。学生たちの聞き書きの記録は、どれも稚拙なものではあったが、確実に、聞き書きという方法が秘めている可能性の一端を垣間見せてくれた。いまも、わたしのなかには、四百編のレポートを読み進めていったときの不思議な興奮が、くっきりと刻まれている。

＊　　＊

あるとき、七十四歳の芸者さんに聞き書きをしたことがあった。

新庄市内のかつての花街・万場町に、その人を訪ねた。小さい頃に、芸者に売られたのだろうと、わたしは漠然と思いこんでいた。それゆえ、はじめに、気をきかしたつもりで「いろいろお聞きしたいんですが、もし差し支えがあれば、無理にお話しいただかなくとも結構ですから」と言ったのである。その人は即座に、「いえ、ひとつも話せないことはありません、何でも聞いてください」と言い切った。切れ味の鋭い語りには魅せられた。芸事が好きで芸者になった人だった。子どもや孫もいると聞い

たので、「結婚なさったのは、おいくつの時ですか」と質問してみると、その人はこちらをまっすぐに見て、「芸者は結婚せず」と答えた。お妾さんだったのである。

その人は死ぬまで、現役の芸者として座敷に出た。聞き書きから半年もせずに、ガンで亡くなっている。死期が近いことを知りながら、その人は見ず知らずのわたしを迎え、堂々と、自分の人生について誇りをもって語ってくれた。わたしが芸者という存在にたいして持っていたイメージは、その人によって覆された。十歳のときから花街で生きてきた、という。その人はまさに、芸者としての人生をまっとうしたのである。

聞き書きの旅を重ねながら、いろいろな世界に出会った。自分の知らない生業があり、暮らしがあり、生き方がある。訪ねた人たちからは、聞き書きという行為を仲立ちとして、いろいろなものを与えてもらった、そんな気がする。聞き書きはたいてい、話し手の言葉を一方的に聞くものだと思われている。まったくの誤解である。それはむしろ、話し手と聞き手とが織りなす語りの場から起ち上がってくる、一回かぎりの、どこか生き物みたいな関係の所産だ、といっていい。

ところで、聞き書きにとって、最低限の必要なモラルとは何か、と問いかけてみる。ひとつは、聞き書きは裁きの場ではないということだ。つまり、その人の生きてきた人生がどんなものであれ、それをみずからの価値観のモノサシで裁いたり、測るべきではないということである。たとえば、「土佐源氏」の老人を「女たらしのスケベ親父」と呼ぶことは、いま・この場所での価値観をもって、過去に生きた人、あるいは民俗社会のさまざまな現象を裁くことになる。その時代、その土地に生きる人たちにたいする、敬意や共感、または愛といったものから、聞き書きははじまるのではないか。

以前に、金山町の開拓村を訪ねたときのことである。そこは、満州移民として大陸に渡った人たちが、敗戦とともに命からがら日本へ還ってきて、原野を切り拓いてつくった村であった。そのときの聞き書きでは、満蒙開拓の悲惨な歴史が大きなテーマとなった。語り部の女性は、満州で三人の小さな子どもを亡くしていた。にもかかわらず、ほんとうに大らかで強い語りだった。その人が、たしか二度目の聞き書きのあと、玄関で靴を履いているわたしの背中に向かって、呟くように投げかけた言葉が忘れられない。その人はぽつりと、「これで、わたしたちの歴史が残ります」と言ったのである。それはとりあえず、わたしにたいしての感謝の言葉だったが、じつはそれ以上に、その言葉はわたしが十年、二十年と仕事をしてゆくうえで、ほんとうに豊かな励ましでありつづけるだろう、というたしかな予感がわたしにはある。

それにしても、歴史とは何か。あるいは、聞き書きから見えてくる歴史とは何か。

歴史にはおそらく、「大きな歴史」と「小さな歴史」がある。大きな歴史というのは、たとえば一一九二年に源頼朝が鎌倉幕府を開いたといった、文献史料に載っている出来事である。それにたいして、もうひとつ小さな歴史がある。これは年号や固有名詞とは関係のない、常民が親から子へ、子から孫へと耳の言葉に託して語り継いできた歴史である。聞き書きから浮かびあがる歴史とは、あきらかに、この小さな歴史の群れである。そこには、しかも、大きな歴史が孕まれている。だから、聞き書きという方法は、わたしたちの記憶と歴史を読みほどくための可能性を秘めているのだ、と思う。

断章その二／記憶・物語・歴史をめぐって

たとえば、そこにはただ茫洋と、記憶の海が広がっているのではないか。個の記憶、村の記憶、都市の記憶、国家の記憶、民族の記憶、世界の記憶……など、ありとあらゆる記憶が渦をなして流れ込んでゆく、そんな広大な記憶の海を思い浮かべてみればいい。まさにカオスが渦巻く海原である。すべての記憶をこの世に留め残すことは、当然とはいえ、できないし、その必要もない。それでは、いかなる記憶が残されるべきなのか。そこには、いかなる選別の基準がありうるのか。わたし自身がこだわりたいのは、ごく限られた記憶の群れである。常民にかかわる、小さな記憶の群れである。その人生や、暮らしや生業、また、かれらが生きてある土地や、そこに展開されてきた歴史などをめぐる、ささやかに過ぎる記憶の一群である。常民の記憶と名付けておきたい。

記憶というものは何であれ、とても不可思議な生き物である、定まった形がない、輪郭も曖昧だ。だから、それはときに、大きな意志をもって操られ、組織され、さらには捏造されることもある。むろん、たったひとつの、正しい記憶がどこかに存在するわけではない。記憶をめぐ

る現場には、避けがたく小さな政治、大きな政治の影が射している。常民の記憶もまた、ひとつの政治であり、その政治をうしろ盾とした選択の所産である。

柳田国男とその民俗学以前に、だれが常民の記憶などに、時代を読みほどく鍵を見いだしたか。なに、常民だって、虫にも歴史って奴はあるのか——。そう、名高い歴史学者がうそぶいた、という伝説がひそかに語られている。戦前のことだ。そんな声はたしかに、めっきり聴こえなくなったが、常民の記憶に耳を傾ける技術がそれほど進んだわけでもない。とはいえ、記憶の争奪戦に巻き込まれる必要は、とりあえずないだろう。ただ、記憶がつねに、個と世界のはざまに揺れながら、それぞれの地平で演じられ、解釈され、組織されてあることに、自覚的でありたいと願う。

それとは気付かれぬままに、記憶の海は枯れることがある。なぜなら、記憶は語り部とともにあるとき、はじめて生命を吹き込まれ、蠢きだすものであるからだ。記憶はくりかえすが、やわらかな生き物である。語られることのない記憶は、この世に痕跡を残すこともなく消えてゆく。数も知れぬ記憶の屍が、まるでヘドロのように堆積する。海は腐臭を漂わせながら、干からびる。だから、記憶は語られ、名付けられ、記録されねばならない。記憶はみな、この世に生きてあった痕跡を、そうして留めることを願っているのではないか。いや、むろん、人知れず忘却されることだけを望んでいる記憶もあるにはちがいない。そして、のちの世に生きる者らにとってこそ必要な、一群の記憶もまた存在する。とりわけ、常民の記憶とはそうしたものである。

*　　*

常民の記憶に形をあたえるための、いくつかの方法が考えられる。そのひとつが、聞き書きという方法である。聞き取りでもなく、取材でもなく、またインタヴューでもない。ここではあえて、聞き書きと名付けておきたい、民俗学に固有とされてきた方法である。それはしかも、しばしば専門的な習練を経ていない、アマチュアの好む手法として蔑まれている。しかし、民俗学的な知は疑いもなく、この聞き書きという方法によって支えられ、育まれてきたのである。聞き書きによって民俗誌が編まれ、それを土台として、民俗学の骨組みは整えられてきた。いわば、聞き書きこそがはじまりの方法であったし、依然として、それはもっとも大切な方法でありつづけている。しかも、その方法的な意味が問われることは、滅多にない。無意識のレヴェルに棄て置かれてきた、と称してもいい。

聞き書きとは何か、と問うことは、民俗学の無意識を揺さぶることである。ありていに言えば、それは聞いて／書くことである。そこに聞き書きの秘密がある。聞くという行為で完結するのであれば、聞き書きとはならない。書くという行為がそれに続くのである。そこではじめて、文体が問われることになる。聞き書きの現場では、それぞれに固有の文体を紡ぎだすことが求められている。しかも、聞くことと書くことが対等な関係を切り結ぶところに、聞き書きの醍醐味は見いだされる。聞くプロセスと書くプロセスとが対をなすことで、聞き書きという往還運動が成り立つのである。民俗学が、それゆえに聞き書きが、たとえば他者の魂に触れるといった、あくまで大それた欲望を抱えこんだ知の営みであるかぎり、いかに、この往還運動を演じるか、という問いは不可避である。いずれであれ、往還の運動とは無縁な、みずからの文体を知らぬ聞き書きは、たんなるインタヴューでしかない。

聞き書きとはだから、常民の記憶を紡いで、一枚の織物へと仕立てあげる技術である。　その人の記憶の扉を静かに叩くところから、聞き書きははじまるだろう。どんな小さな身体にも、思いがけず豊かな記憶が詰まっている。どんな小さな土地にも、ささやかな誇りと輝きにみちた記憶が眠っている。小さな身体や土地に埋もれている、そうした記憶のいくつかを、偶然の出会いが呼び覚ます。その人の記憶は、形を求めている、みずからの輪郭を欲しがっている。常民の記憶は物語られ、形をあたえられることで、はじめて小さな歴史へと変成を遂げてゆくきっかけを得る。聞き書きはいつだって、そうして小さな歴史を編むための、はじめの一歩である。聞き書きはそのとき、記憶と歴史をつなぐ技術であり、あえて言えば、歴史への意志を孕んだ思想の文体それ自体となる。

*　　*

語り手と聞き手がいる、そして、聞き書きは両者の交わりと結びの現場である。その人の記憶から紡ぎだされる物語には、おそらく聞き手の数だけ、無限のヴァリエーションがある。聞き書きは一期一会の出会いがもたらす、語りのフィールドであるからだ。たしかに、虚空に放た

れる物語といったものも、想定することは可能だろう。しかし、それは他者には届かない、虚空に霧散して消え失せる。聞き手という他者がいて、その他者との交わりと結びのなかに、記憶は受肉を果たし、歴史語りへと成りあがるのである。そこでは、見えにくい形で、解釈の地平が定めなく交替をくりかえしている。それゆえ、物語られる歴史にも無限のヴァリエーションがあって、そこには正史も偽史も存在しない。小さな歴史はいわば、正統と異端の相克とは無縁なのである。歴史とは思えば、そうした解釈の地平の交替とともに、その肌触りや貌つきすら変えてゆくものであることが、はからずもそこに露呈する。歴史とは物語である、と言い換えても同じことだ。

その小さな歴史は、大きな歴史を紡ぐための豊穣なる種子である。たとえば、大きな歴史とは、文献史料によって編みあげられる、年号と固有名詞を背負った歴史である。小さな歴史はそれにたいして、年号や固有名詞とは無縁な、多くは常民の口伝えの歴史である。あまりに古典的な定義と笑いそしられるとしても、その分割はいま・ここにおいても、有効性の大半を失ってはいない。しかも、その土地に生きられてあった、数も知れぬ小さなライフ・ヒストリーの群れは、それぞれに大きな歴史を孕んでいる。蠢きはじめた小さな歴史の群れは、やがて地域や国家・民族の大きな歴史へと連なり、伸び広がってゆき、それを鮮やかに浮き彫りにする。だから、すぐれた聞き書きは、小さな歴史と大きな歴史とをつなぐ方法ともなるはずだ。語り部とはだれか、物語る場はどこにあるか、語り継ぐための装置をいかに創出するか。聞き書きはそうして、かぎりなく方法的な問いのなかへと導かれてゆく。

しかも、この歴史は知識の集まりではない、ノスタルジーでもない。歴史を学ぶことは、いま・ここに生きてある自分自身を知ることである。昨日を知らずして、今日はなく、明日について豊かに語ることもできない。歴史はいま・ここに息づいている。そして、聞き書きを通じて、その人、その時代を知ることは、他者の歴史をともに生きることでもある。その人の歴史はやがて、わたし自身の歴史の血や肉となり、明日を生きてゆくための精神の糧となるかもしれない。そんな幸福な出会いが、ときに、聞き書きの現場には芽生えることがある。過去・現在・未来はたんに、ひと連なりの流れ過ぎる時間ではない。過去がすでに未来を宿し、未来がしばしば過去を照らしだすような、たとえば行きつ戻りつする可逆的な時間である。歴史がつねに再審の眼差しにさらされているのは、そのためだといっていい。歴史にまつわる最大の誤解は、歴史を過ぎ去った時代への郷愁と同義に結ぶことである。

*　　*

それにしても、聞き書きはマニュアルのない実践であることを強いられる。それが一期一会の出会いの場であるならば、聞き書きにはマニュアル化した方法はいらない、いや、それはむしろ無用の長物ですらある。より正確には、聞き書きの方法はつねに構築され、壊され、また構築される、終わりなき運動のなかにある、ということだ。聞き書きはここでも生き物である。語りの場の自然な流れに身をまかせながら、いつしか聞き手は、その人の物語りする歴史の立ち会い人となる。語りの軌跡を辿りつつ、あらたな歴史叙述への欲望が姿を現わすのは、その次の段階である。「聞く」から「書く」へと、場が移行したとき、別の次元の対話がはじまっている。そこでも、硬直したマニュアルは手かせ足かせとなって、文体そのものを呪縛する。むろん、マニュアルという導きそれ自体を拒んでいるわけではない。マニュアルによる専制支配に身をゆだねるとき、いつしか堕落がはじまるのである。そのことに自覚的でありたい。

聞き書きはやがて、内なる異文化をもとめての旅と化してゆく。ほんの偶然の誘いによって、その人と出会う。その人は、そこに、どこか異文化の匂いを漂わせながら、ひっそりと息をひそめ佇んでいる。わたしが生きてある、この時代、この場所は、その人が生きてあった時代や場所からは、はるかに遠い。しかし、ふと気が付くと、その人の声や身振りや言葉の断片が、とても懐かしいものに感じられる。わたしの身体の深みには、その人と分かち合うべき記憶が、幾重にも層をなして埋もれている、その人が抱え込んでいる異文化は、わたし自身の遠い記憶でもあるのかもしれない、そんな気がする。そのとき、その人はわたしの内なる他者となり、聞き書きは内なる異文化をもとめての旅となる。おそらく、異なった民族を対象とする、人類学的なフィールド・ワークとの決定的な断絶が、そこに浮かびあがる。どれほど隔絶した匂いを漂わせているとしても、それは内なる他者・内なる異文化の位相にあるからだ。まったくの他者や異文化と向

かい合うときに必要とされる作法とは、やはり一線が画されるにちがいない。

常民の記憶を残すための方法は、言うまでもなく多様である。そもそも聞き書きは、民俗学の専有物ではありえない。とりわけ、民俗学の落日が囁かれる時代には、聞き書きの結晶であるべき民俗誌に、昔日の勢いは見られない。マニュアルの専制支配を逃れて、あらためて聞き書きという方法を再検証しつつ、あらたな民俗誌への模索を開始しなければならないのかもしれない。

たとえば、これまで民俗誌とルポルタージュとを隔ててきた垣根は、とても低くなっている。ジャーナリズムや文学に携わる人々のなかから、聞き書きという方法を駆使して、まさに現在の事実に肉迫せんとする仕事が数多く出現している。かれらの、すくなくとも一部はすでに、民俗誌のあつかう領域に分け入りつつある。かれらが民俗学者よりもはるかに繊細な手さばきで、村や民俗についての記録を行なう、そんな時代はすぐそこまで訪れている。民俗学とジャーナリズムがたがいを隔てる境界を侵しながら、あたらしい記憶と記録をめぐる方法を創出する可能性すら、おそらく、けっして夢物語ではない。

現実はいつだって方法に苛まれてきた。みずからは選ぶことのかなわぬ方法によって、俎上に乗せられ、切りさばかれてきたのである。どれほど生き生きと現実を捕捉することができるか、その一点においてこそ、方法的な成否は問われるべきだ。原則はただ、それだけである。

＊　　＊

いま確実に、地域の時代が幕を開けようとしている。あの「地方の時代」の虚妄と残骸のうえに、あらたな地域の時代は築かれねばならない。戦後の、高度経済成長期と呼ばれた時代をくぐり抜けて、この弧状なす列島の村や町や都市はみな、個性の抹殺と均質化を強いる、見えない、しかし巨大な暴力の洗礼に見舞われてきた。いままた、さらに高度に肥大した、グローバル化という名のアメリカ一国中心主義の専制が、すべてを覆い尽くそうとしているかに見える。ところが、ここに、ひとつの逆説的な光景が浮上してくる。その無限の均質化を強いる暴力が、逆に、ある精神的な拠りどころとしての地域への関心を呼び覚ましているのである。相対的に国家の敷居が低くなるにつれて、地域がせり出してくる。このとき、地域とは国家を下方から補完する地方ではなく、一定の自立した物質的かつ精神的な基盤のうえに、人が人として生きてあるための場所を意味している。いま、こうした地域が、その可能性が切実に問われはじめている。

それゆえ、地域学をめぐる動きがさまざまに起こりつつあるのは、偶然ではない。地域が地域みずからを内省的に問いかける動きを、仮りに地域学と呼んでおく。ほとんどの地域学はいまだ、みずからの輪郭すら定めることができぬままに、頼りなく漂流している。しかし、それらが無意識のレヴェルにおいてではあれ、地域の内発的な発展をめざす運動という貌をそなえていることは、おそらく否定しがたい。地域が内発的な力に支えられて起とうとするとき、地域学はひとつの必然である。地域みずからが宿す歴史や文化こそが、やがて地域を豊かに演出してゆくための地域資源となるだろう。その地域資源の掘り起こしをもとめて、地域学はいま、それぞれに産みの苦しみのなかに足掻いている。より深く足掻けばいい、苦しめばいい。苦しみ抜いた果てに、地域学は地域の時代を支える思想へと、また方法へと脱皮を遂げてゆくにちがいない。

地域学はしかも、それぞれの地域を越える可能性を孕んで、そこにある。いわゆる「お国自慢」に閉ざされた地域学の淋しさを、あらためて指摘する必要はあるまい。「お国自慢」に救われ、癒される程度に、現実が牧歌的であるならば、あらたな地域学にたいする欲望など芽生えはしない。地域を語ることがそのままに、地域を拠りどころとしながら、地域から開かれてゆく歴史や文化への眼差しを鍛えあげることにつながっている、そうした知の回路が求められているのではないか。そこにかぎりない快楽がひそむ。むろん、それが地域学のめざすものである。地域学はそうして、あくまで地域に執着しつつ、それゆえに地域を越える可能性へと開かれてゆく。そんな逆説がいまは、あえて語られねばならない段階にあることを、隠すつもりはない。

＊　　＊

場所に宿りする記憶が、さまざまに掘り起こされる時代となる。空間はそこに、ただ、のっぺりと無機質に広がっている。この空間が場所へと変成を遂げるためには、記憶と体験の仲立ちが何より必要とされる。場所は固有の痕を刻まれて、そこに姿をあらわす。場所にはたくさんの記憶が堆積している。場所とは、むしろ記憶と体験の結晶そのものである。明治以降の近代化への動き、幾

度かの戦争がもたらした混乱、そして、戦後の高度経済成長へと連なる過渡の時代は、いわば場所の破壊と殺戮のために費やされた歳月であったかもしれない。それぞれの地域に分厚く堆積していた常民の記憶が、根こそぎに奪われ、壊されてゆく。そのとき、場所の個性もまた、見えにくい形で、根絶やしに解体されていったことを忘れてはならない。均質化とはまさに、場所の破壊の別名詞にほかならなかった。これからの時代にもっとも深刻に問われることになるのは、場所の回復という、あらたな未知に属するテーマである。

いずれであれ、場所の破壊と殺戮を自明と見なす時代は、やがて終焉を迎える。のっぺりと、ただ均質な空間が果てしもなく広がる光景には、たぶん、わたしたちの神経は耐えることができない。人はみな、それぞれにメンタル・マップ(心の地図)を携えながら生きている。その地図には、それぞれの記憶と体験にしたがって、無数の書き込みがあり、さまざまな符牒が記されてある。この心の地図作りこそが、人がみな無意識に行なっている、空間を場所に変えるための象徴的な操作なのかもしれない。

メンタル・マップはしかも、たんに個に属すわけではない。それはたいてい、他者の記憶や体験とつながりながら、より大きな村や町や地域の人々によって共同化されている。村や町、そして都市には、それぞれに集合的な記憶が投影された、いくつもの地図が存在するのではないか。それは場所の個性を刻印された、見えない地図の群れである。そうした見えない地図は、場所が根こそぎに壊されてゆく時代のなかで、それと気付かれぬままに破かれ、燃やされ、姿を消していった。いま、回復されねばならないのは、この地図であり、場所であり、そこに埋もれている常民の記憶である。

思えば、すべては時代錯誤に過ぎる、問いと試みばかりなのかもしれない。いかに常民の記憶を残し留めるか、そして、それをどれほど豊かに回復しうるか。こんな時代に、そんな問いを投げかけること自体が、錯誤と逡巡に満ちていることは言うまでもない。そもそも常民など、この時代のどこに存在するか。いや、常民は柳田によって発見されたが、その柳田の時代においてすら、すでに一個の幻影であり、むしろ理念の結晶であった。柳田の以前に、常民という歴史的な実体が存在したわけでもない。それは民衆といい、人民といい、市民といっても同じことだ。どれもみな、ひとかけらの幻影である。

それにもかかわらず、その幻影に過ぎない常民が生き生きと立ち上がってくる瞬間は、確実にある。むろん、常民はいかにも古めかしい。その古風なたたずまいが、しかし、わたしには何とも好ましく感じられる。民衆や人民ではない、当然ながら、市民ではない。とりあえず、時代錯誤を承知のうえで、それは常民と名付けられるほかにない、とあらためて思う。東北学はいわば、常民の記憶を掘り起こし、記録に留めるための、ささやかな運動の拠りどころとなるにちがいない。

あとがき

ここに収めた二つのノートは、ひとつは高校生を相手に行なった講演記録を元にしたものであり、いまひとつは『別冊東北学』第一号に掲載した覚書きを一部手直ししたものである。本稿をもって、とりあえず、本学の平成８年度特別研究に採択された「聞き書き調査の実践と方法的可能性の検討」の報告に代えたいが、関連する調査・研究の成果そのものは、すでに別の形でさまざまに公けにしてきたことをお断りしておく。その一端は、『山野河海まんだら』(筑摩書房、一九九九年)や『民俗誌を織る旅』(五柳書院、二〇〇二年)のなかで、また、聞き書きの雑誌である『野を刈る』や、本学東北文化研究センター刊行の『別冊東北学』誌上に示してあるので、参照していただければ幸いである。